

# 科学よもやま話

第6回

## 科学技術と遊びの文化



佐藤 勝昭

今回お届けするスケッチは、前回に引き続いてパリのシャンゼリゼ通りで描いた祝日の風景です。歩道に店を張りだしたレストランやカフェで青空のもとで食事をする風景は日本でも珍しくなくなりましたが、やはり本場はパリでしょう。休日ともなるとシャンゼリゼ通りのレストランはどこも大勢のお客さんでいっぱいになります。フランスの人々はみんな遊び好きで、本当に人生を楽しんでいるように見えます。

エコノミックアニマルなどと揶揄される日本人ですが、元来どの国にもひけをとらないくらい遊び好きだったのです。遡ること300年前の江戸時代の市民社会では、歌舞伎、文楽、落語、音曲、俳句、

浮世絵、茶の湯、生け花など遊びの文化が花盛りでした。科学技術もまた遊び道具になりました。西欧から輸入された時計の技術は発展して「からくり人形」として人々を楽しませました。静電気発生装置（エレキテル）は「百人おびえ」という遊び道具として物見高い市民の間にはやりました。

今では、カラオケ、パチンコ、マンガ、アニメなど、日本発のエンターテインメントが世界中を駆けめぐっています。ウォークマン、ミニディスク(MD)、携帯ゲーム機、デジタルカメラ、DVD、携帯のiモード、カメラつき携帯電話、薄型テレビなど、日本人は今も科学技術の成果をつぎつぎと遊び道具に変えているのです。

最近の若者達を眺めていて感心するのは、子供の頃からパソコンのキーボードやゲーム機に触れて育ったので、ハイテク遊び道具を実に上手に使いこなしていることです。メールはもとより、ネットとの付き合い方も実に手慣れたものです。彼らはきっと私たちが思いもつかないようなハイテク遊びを生み出したり、それに飽き足りないで新しい技術を開発したりすることでしょう。

その一方で、若者達は、数学や理科の学力だけでなく、倫理観や国語力など大切な物をなくしました。数学や理科は高等教育で補うことができますが、文化を支える倫理観と国語力の回復は簡単ではありません。基礎になる確かな学力をとりもどし、高い倫理観と言葉の力を取り戻したとき初めて、ホンモノの「遊びの文化」を創造することができるでしょう。今年はじまった初等中等教育の見直し、再構築に期待したいものです。



祝日のシャンゼリゼ通り